

令和 2 年 6 月 24 日現在

機関番号：12604

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K04750

研究課題名(和文) 幼年期歌唱発達児のモチベーションを高める指導法の開発

研究課題名(英文) Developing a teaching method to raise singing motivation of young children

研究代表者

水崎 誠 (MIZUSAKI, Makoto)

東京学芸大学・教育学部・准教授

研究者番号：50374749

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：幼年期歌唱発達児のモチベーションを高める指導方法を開発するために、2つの研究をおこなった。研究1では、5歳児クラスにおける歌唱活動場面を対象とし、個別の歌声を検討したところ、クラス歌唱時よりもグループ歌唱時で評定値が高い幼児が複数名で確認された。グループ歌唱時での優越動機づけにより、歌唱モチベーションが高まり、歌声の変化が生じたと考察した。研究2では、5歳児クラスにおける新曲導入初日の指導場面を対象とし、個別の歌声を検討したところ、抽出児A子の歌声が活動中に大きく変わったことを確認できた。教師による具体的な言葉がけにより、A子の歌唱モチベーションが高まり、歌声の変化が生じたと考察した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

幼年期歌唱発達児は歌唱能力が単に低いのではなく、そもそも歌唱モチベーションが低い場合がある。したがって、幼年期歌唱発達児への指導法を考える上で、モチベーションから検討することは重要であるが、研究事例は皆無である。本研究は幼年期歌唱発達児のモチベーションを高める指導法の開発をおこなうものであり、指導法研究を新しい視点から進めたところに意義がある。またモチベーションの変化によって、対象児の歌声が変化することを音源データおよび数値によって示したことに特色がある。本研究の知見は、5歳児の幼児を対象としたものである為、年齢に近い小学1～2年生にとっても、指導の手がかりを与えると期待できる。

研究成果の概要(英文)：Two studies were conducted to develop a teaching method to raise singing motivation of young children. For study 1, the object was a singing activity scene in a class of 5-year-old children. Individual singing voices were examined. Results confirmed that multiple children achieved higher rating scores in group singing than in class singing. Those results suggest that singing motivation was raised because of superior motivation for group singing and that their singing voices were enhanced. For study 2, the object was an instructional scene on the first day of teaching a new song in a class of 5-year-old children. Individual singing voices were examined. The results showed that an extracted child A's singing voice was significantly enhanced during the activity. Results suggest that her singing motivation was raised by the teacher's verbal encouragement, which resulted in enhancement of her singing voice.

研究分野：幼児音楽

キーワード：歌唱

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

「幼年期歌唱発達児」とは、「歌唱における発達中の幼児」のことを意味する。幼年期歌唱発達児の中には、歌に対する能力が単に低いだけでなく、そもそも「歌唱モチベーション(歌唱意欲)」の低い幼児が一定数で存在する。新しい曲を覚えることへの不安、1曲すべてを歌い切る自信のなさ、集団の中での自己表現力の弱さなどが歌唱モチベーションの低さに複雑に絡んでいる。したがって、幼年期歌唱発達児の指導では、モチベーションをどのように高めるのが重要とされる。

幼年期歌唱発達児の指導に関しては、これまで多くの研究がおこなわれてきた。それらには、歌声の優位性と嗜好(Hermanson, 1972; Mimura *et al.*, 2009; 小川・嶋田, 2013)、ピアノ伴奏の効果(Atterbury & Silcox, 1993; 伊藤ほか, 2011; 山根, 2009)、課題の難易度(Trollinger, 2003; White *et al.*, 1996)、歌唱形態(独唱と斉唱)(Goetze & Horii, 1989; Leighton & Lamont 2006; Smale, 1987)、歌詞の有無(Levinowitz, 1989; Lange, 1999)、身振りの効果(Liao, 2008)、言語フィードバック(Rutkowski & Miller, 2003)、音楽的環境(Persellin, 2006)が挙げられる。しかしながら、これまでの研究では教師の基本的技術に関する検討が主であった。したがって、幼年期歌唱発達児のモチベーションをどのように高めるのかについては取り上げられてこなかった。モチベーションの高まりは歌唱能力の向上につながるであろうし、身についた能力はより良い歌声を目指すモチベーションを高めるであろう。幼年期歌唱発達児の指導を考える上で、モチベーションは重要な事項と言える。

研究代表者は、本研究課題の基礎研究として、幼年期歌唱発達児のモチベーションを高める指導法に関する事例研究をおこなった。水崎(2016)(日本音楽教育学会第47回発表)では、6歳児の男子1人を対象として、歌唱活動中の様子を観察した。対象児の様子はデジタルビデオカメラで録画し、歌声はピンマイクをつけてもらいICレコーダーで録音した。観察の結果、対象児の歌唱に対する態度変容から、歌唱モチベーションが高まったことが明らかにされた。またモチベーションが高まると、「唱え」のような歌い方であった対象児が、旋律輪郭をもってしっかりと息の支えで歌うこと(すなわち歌声の変化)も明らかにした。この研究結果は、幼年期歌唱発達児のモチベーションが歌唱活動中に高まることを具体的に示すものである。水崎(2016)では幼児1人を対象にしたものであり、今後より多くの対象児で検証することが求められる。

2. 研究の目的

本研究は、幼年期歌唱発達児のモチベーションを高める指導法を開発するための基礎研究として、2つの研究をおこなう。それぞれの目的を挙げる。

(研究1)本研究では、幼稚園での歌唱活動場面を対象とし、活動中における個別の歌声の変化の実際、および変化が生じた原因について考察していくことを目的とする。先行研究では、集団歌唱における個別歌唱について検討しているが、既知曲や課題曲を集団で歌唱させる、もしくは既知曲を数種の実験条件のもとで歌唱させるものであった。したがって、日常の歌唱場面のなかで、幼児がどのように歌っていて、その歌声が活動の文脈のなかでどのように変化していくのかについて検討されていない。実際の保育活動のなかでの、幼児の歌声の実際を検討することは、歌唱活動を通して発達しつつある幼児の具体像に迫る意味でも、多くの示唆を与えると考える。

(研究2)5歳児クラスの歌唱活動を対象として、2つの研究目的を挙げて研究をおこなう。研究2の第1目的は、5歳児クラスにおける新曲導入初日の指導について明らかにすることである。水崎(2016)は、幼稚園4歳児クラスを対象として、新曲「うさぎ野原のクリスマス」の導入初日の指導について検討している。教師は歌に関係する絵本の読み聞かせで導入をして、視覚教材を用いながら、指導をしていた。この知見と比較しながら、5歳児での実際について明らかにする。また、この新曲導入での活動中に、幼児の歌声がどのように変化したのかを明らかにすることを研究2の第2目的とする。クラス全体の歌声ではなく、活動に参加する幼児の個別の歌声を検討する。

3. 研究の方法

(研究1)対象は、2年保育の公立幼稚園の年長児(5,6歳児)17人(男子9人,女子8人)であった。全員にピンマイクを襟元に付けてもらい、ICレコーダーで歌声を録音した。活動の内容は、「たいせつなことからもの」(作詞・作曲:新沢としひこ)(4分の4拍子,八長調,C4~C5)の担任教師による指導である。指導では電子ピアノによる録音伴奏が用いられ、この伴奏は活動中の歌唱時に用いられた。歌唱活動は約25分間であり、担任教師1人によって進められた。「声遊び」として教師の様々な声を模倣することが導入とされた。その後、「クラス歌唱」、「グループ歌唱」、再び「クラス歌唱」という流れで進んだ。「グループ歌唱」では、単にグループごとに発表するのではなく、のどまん大会と称しておこなわれた。グループ歌唱後に、聞いている人は感想を言い、教師によって鐘が鳴らされた。この鐘は、女児からの提案により活動に取り入れられた。指導では電子ピアノによる録音伴奏が用いられ、この伴奏は活動中の歌唱のすべてで用いられた。したがって、同一の伴奏条件下で、歌声の実際(変化)を検討できる。

対象児1人ひとりの歌声は、次の手順で数値化された。1つは「どこを歌ったのか」であり、歌った音数を確認した。歌った音数を確認し、「(歌った音数÷46[全測定箇所]×10)」に当てはめて数値に変化した。もう1つは「どのように歌ったのか」であり、「言葉の明瞭さ」(5:非常

に明瞭である，4：かなり明瞭である，3：明瞭である，2：あまり明瞭ではない，1：明瞭ではない」と「音高」(5：ほぼあるいはすべて正確な音高で歌う，4：定められた調で歌い始め，ある程度正確な音高で歌う，3：定められた以外の調で歌い始める，または曲の途中で調がはずれるが，ある程度正確な旋律形と音程で歌う，2：おおまかに旋律の輪郭を歌う，1：音域が狭く，歌うというよりも唱える。または，この曲とは異なる旋律の輪郭で歌う)のそれぞれについて，5段階で評定した。これら2つとも，研究協力者との合議で判定した。

(研究2)対象は，2年保育の公立幼稚園の5歳児クラス26人(男子19人，女子7人)とその担任教師である。担任教師は，女性で年齢40代前半，保育経験年数(公立幼稚園)21年目である。音楽経験としては，小学生の時に1年間だけピアノを習っていた。活動の内容は，「ちきゅうはひろば」(作詞：邑井俊也，作曲：三浦真理)1番の担任教師による導入初日の指導である。4/4拍子で16小節，音域はC4～A4であり，八長調の明るい曲である。本活動のねらいは「歌詞の意味や歌の雰囲気をつ捉えて，教師や友達と一緒に歌う」「友達と一緒に歌うことを楽しむ」であった。なお教師はこの歌を初めて指導した。幼児は半円形で椅子に座り活動に参加した。活動中の幼児の歌声を録音するために，幼児1人ひとりにピンマイクを襟元に付けてもらい，ICレコーダーで録音した。

4. 研究成果

(研究1)分析対象児17人について，活動中の歌声(クラス歌唱時，グループ歌唱時，クラス歌唱時)について歌声の変化を検討した。その結果，17人中の4人についてクラス歌唱時よりもグループ歌唱時で評定値が高かった。この4人について，まずクラス歌唱時における評定値の低さを社会的な手抜き(社会的抑制)の点から考察した。社会的な手抜き(社会的抑制)とは，集団で協同作業をする際の1人当たりの課題遂行量は単独作業の際より低く，さらに集団サイズの増大にともなって低下する現象をさす。本活動では，単独で歌っているわけではないので，「社会的な手抜き」そのものではないが，「グループ」と「クラス」での人数の違いは歴然とあり，この4人におけるクラス歌唱時に「社会的な手抜き」が生じていると考察した。次に，グループ歌唱時における評定値の高まりを動機づけの点から考察した。優越動機づけとは，他児との比較において優れたという動機をさす。本活動では，活動中のグループによる「のどじまん大会」において，より多い「鐘の数」を取るために，頑張るという意欲を生じさせたことと考察した。本研究の結果は，歌唱活動の指導内容に影響を受けて歌声が変化する(あるいは自ら変化させる)幼児がクラスにいることを示すものである。今回の録音データによる評定値の結果は，幼児の歌唱モチベーションが高まった時の歌声の実際を採取したものと考えられる。「歌えない」のではなく，「歌わない」のである。こう考えれば，幼児自らが歌いたくなるような活動のあり方を学術的にもさらに検討していく必要があるとまとめた。

(研究2)本研究で明らかになった特徴として2点が挙げられる。第1に，対象教師が教材を全く用いずに指導したことである。一般的に歌の導入では，絵やペーパーサートなどの視覚教材を用いることが多く，5歳児であれば歌詞カードを提示する場合も少なくない。しかし，本研究ではこのような教材は用いられなかった。その理由について教師への事後のインタビューでは，今回の歌詞の内容が幼児の経験から捉えることができると考えていたこと，そして歌詞から幼児自身がイメージを広げてもらいたかったことを語った。この為に，イメージを固定化させてしまうことになる絵や言葉だけを追うことになる歌詞カードを提示しなかったとも語った。つまり，教師は教材を単に使わなかったのではなく，あえて使わなかったのである。クラス担任による日頃の幼児理解と活動のねらいに基づき，指導法の選択があったと言える。第2に，対象教師は幼児達と歌詞の意味を考えあったことである。教師は一方的に歌詞について説明することはなく，幼児達に歌詞の意味を質問することで，クラスで考えていった。ここでの質問は幼児達が教師の説明を聴いて理解するというより，幼児達自らが考えていくことが必要とされるのである。歌詞だけを手掛かりに，幼児達が自分なりのイメージを膨らませることを意図していると考えられる。また教師は考えあうなかで，幼児の答えに対して問い直しもして，より深く歌詞の雰囲気が捉えられるようにしていったと考えられる。

録音された対象児個別の歌声を聴取して，活動中の6回の歌唱で変化が顕著であったA子を抽出した。A子は，活動のはじまりから積極的に教師の歌声に唱和させており，歌詞の意味を考える場面でも，積極的に発言していた。6回の歌唱のなかで，抽出児の歌声は大きく変化していった。その内容は，歌える部分が増えていき，声が大きくなったという単純なものではなかった。声にリズム感が生じ，鳴り響くようになってきたのである。このような歌声の変化の背景には何があるのかを考察した。A子の歌声は5回目の歌唱で大きく変わった。教師は5回目の歌唱に入る前に，A子の発言を取り上げ，楽しい歌声になるための具体的な方法について伝えた。また歌唱に集中する場を整えた。このような教師の働きかけは，歌に対してのA子のモチベーションを高めたと考えられる。このモチベーションに支えられて，A子の歌声は5回目でも大きく変化した。その変化は，8～9小節目の「ひろい」箇所でも顕著であった。この箇所は，後半のはじまりであり，曲のポイントになる部分でもある。歌詞の「ひろい」を表わすような旋律が付されている。A子はこの箇所でも体を使いながら，より響かせるようにした。繰り返し歌唱するなかで曲の特徴に自分自身で気付いて，それを歌声で表していったと言える。つまり，A子は，単に歌を覚えて歌っただけではなく，曲の特徴に気付き，自分なりの方法で歌唱表現の工夫をしていったと言える。この工夫が歌声の変化としてあらわれたと考えられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 村尾忠廣・岡林典子・水崎誠・中野圭祐	4. 巻 16
2. 論文標題 こどもの歌の変貌, その是非	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 音楽教育実践ジャーナル	6. 最初と最後の頁 24-37
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 水崎誠
2. 発表標題 一斉歌唱の指導に関する実践的研究
3. 学会等名 日本保育学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 水崎誠
2. 発表標題 幼稚園教師による歌唱指導に関する研究
3. 学会等名 中国四国教育学会 (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 水崎誠
2. 発表標題 5歳児クラスにおける呼応唱活動の導入と展開
3. 学会等名 日本音楽教育学会中国四国地区例会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 水崎誠
2. 発表標題 幼児の歌声の微視的検討
3. 学会等名 日本保育学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 水崎誠
2. 発表標題 Study of changes in the singing voices preschool children during singing activity
3. 学会等名 PECERA (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 水崎誠
2. 発表標題 幼稚園の歌唱活動における「表現する過程」 - 個別の歌声録音をもとに -
3. 学会等名 音楽学習学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 水崎誠
2. 発表標題 Qualitative changes in the singing voices of kindergarten children
3. 学会等名 PECERA
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 水崎誠
2. 発表標題 歌唱活動中における個別の歌声の変化
3. 学会等名 日本教科教育学会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 井口太（編）	4. 発行年 2018年
2. 出版社 朝日出版社	5. 総ページ数 234
3. 書名 最新・幼児の音楽教育 幼児教育教員・保育士養成のための 音楽的表現の指導	

1. 著者名 初等科音楽教育研究会 編	4. 発行年 2018年
2. 出版社 音楽之友社	5. 総ページ数 256
3. 書名 最新 初等科音楽教育法 2017年告示「小学校学習指導要領」準拠	

1. 著者名 吉富功修・三村真弓（編）	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ふくろう出版	5. 総ページ数 216
3. 書名 改訂4版 幼児の音楽教育法 - 美しい歌声をめざして -	

1. 著者名 石井玲子(編)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 教育情報出版	5. 総ページ数 189
3. 書名 表現者を育てるための保育内容「音楽表現」 - 音遊びから音楽表現へ -	

[産業財産権]

[その他]

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----